

ラプラスの魔

母校の新制中学が町の過疎化のあおりを受けて廃校になった。

指折ってみるとせいぜい五十年程の寿命だったことになる。自分の卒業した学校がそんなに簡単に消えて無くなるとは意外である。母校というものは平素は忘れていてもふと思いついてぶらりと行ってみれば、澄ました顔をして、いつまでも、ちゃんとそこにあるものだと思いついていた。そうでないと困る。

私の中学は市街地のど真ん中であって県庁と向き合い、市一番の繁華街を学区に抱えていたものだから昨今の地方都市を軒並み襲ったドーナツ化現象、つまり街の中心部の過疎化で生徒数が激減していたらしい。そのために同じ事情の隣の学校と統合されて六年制の中高一貫の学校になったのだそう。それは仕方ないとしてもその名称が気に入らない。誰がつけたのか中央学園とか云うらしい。なんたる浅智恵、昔から馴染んだ「丸の内」という城下町らしい学校の名が、口には出さないけれど誇らしかったのに、情けない。町の中央にあることぐらいワカっている。

昭和二十四年といえは占領軍政策で学制が変えられて六三三制になったばかりで私達三期生が入学して初めて三学年が揃って学校の態をなした年で、校舎はまだ無くて先日卒業したばかりの小学校の間借りであった。学校は同じ敷地で容積は変わらないのに、生徒の数ではもうひとつ小学校を詰め込んだのに等しいから諸事混雑して、ヒエラルヒーの底辺に位置する低学年の迷惑はことに甚だしかったけれど、時の浄化作用のせいか暗い思い出はあまりない。階段に折り重なって座って音楽の授業を受けた覚えもある、といってもオルガンさえなくて雀の学校よろしく声を揃えて何の曲だったかを歌うだけだったが、でも、いま思えば一番の被害者は後輩の小学生達だっただろうと思う。遊び場の校庭は勿論学校の隙間という隙間はいたるところ卒業していった筈の先輩たちに占拠されているのだから。最初の担任は数学の太田先生だった。ずいぶん髭の濃い先生で、剃っているのに朝から顔全体が黒く見えた。朴訥な人柄で背広が似合わず数学教師というより近在のお百姓さんという感じだった。実際正月に同級生三人で遊びにお邪魔したらバスで一時間以上かかる郡部の農家に住んでおられた。先生はまだ子どもつばい一年生をすこしもバカにしないで出来の悪いのも少しはましなものも、熟してない言い方だけれども、人間として平等に扱ってくれた。熱くなつて子どもを指導するというタイプではなく、説教じみたことは一度も聴かされなかったが、先生の言動は学問の前に人はみな平等だよと語っていたような気がする。数学が出来なくてもそんなことはちっとも構わないんだと知って、みんな太田先生が好きだった。

学校の昼休みに「貸したお金を取り立てに行くから、ついておいで」というので街の本屋にお供をしたことがある。原稿料の催促だったらしいが交渉不調で、首尾よくいったらご馳走して貰える約束のうどんは「ごめんごめん」と先生に謝られてオジャンになった。五十年前のうどんの恨みをまだ忘れていないとは我ながら浅ましいと思うけれど、これは期待を裏切られた私の思いが強かったからではなくて、たかがうどんで先生にそれほど真剣に謝られてかえって吃驚したのではないだろうか。

数学は何を習ったか綺麗に忘れた。ただ雑談でこんな話をしてくれたことがある。「三人でひとり百円ずつ出し合って三百円の焼き芋を買いに走ったとしよう。ところが焼き芋屋が三十円負けて二百七十円にしてくれたのをいいことに、戻る途中で使いが十円ちよるまかしてしまった。そうするとだよ、三百円から三十円負けて貰ったのだから一人当たりの負担は百円から十円ずつ引いて九十円だよな、これが三人だから三十九の二百七十円、これにひとりがちよるまかした十円を足しても二百八十円にしかない、これはどうしたことだろう」

その後幾多の辛酸を嘗め、甲羅を経た今でもゴチャゴチャして何だかよく分からないのだから、当ても二十円の始末に困ってしまった

「ほんとだ、なんで二百八十円にしかないの」

と初め茫然とし、次いで何がこの異常をもたらしたのかを的確に指摘出来ない自分がいかにも阿呆の様に思われた。悔しくて「そんなのほんとの数学じゃないでしょう」と抗議したら先生は吹き出して

「じゃあ、こんなのはどうだ、大きな紙をこうして二つに折る、それからまた二つに折って、また折ってという風に二つ折りを続けていけば紙がだんだん厚くなっていくだろ、これを積み重ねて富士山の高さにするには何回折ればいいかというのが問題。どうせ暗算なんか出来っこないから直観、直観でいい」

「富士山・・・」

「ミナナ口だよ、三七七六メートル」

白雪の名山の麓で巨大な紙をバサバサ折るのに慣れなくて、残念なことにその直観がどうにも働かない。

「折るたびに倍バイになるんだから、ええと、思い切ってウソ八百回。待てよ、そんなに折れるわけないか」

「実際に折れるわけではないから、みんな頭の中の話だけだね。答えを言ってしまうと紙の厚さが〇・一ミリとしてズバリ二十五回で三三五メートル、もう一回折ると六七〇メートルで三千メートルもオーバーしてしまうからまあ二十五回というところじゃあないか。八百回も折ったら太陽系はおるかこの銀河宇宙からはみ出してしまっよ」

「たつた二十五回で富士山の高さですか、とても信じられませぬね」

「これは信じるとか信じないとかの問題じゃあないんだ。数という魔物は君が信じなくても事実としてここにあるわけだね。ところで僕の身長は一六三センチ程だから、計算して

みると解るけれど十四回折ればこの高さになる。これぐらいだったら実際に折って実験してみると何が出来そうだろう、ところがだよ、十四回折ると、折る面の広さは二の十四乗分の一になっているわけだよ、これがどんなに小さな数かということも直観するのは難しい。折り始める時の紙の大きさがどれぐらいだったら最後まで扱えるか、今度は自分で計算して見て」

以来茫茫五十年、不肖の生徒はまだ計算出来ていない。

(神奈川県医師会報・新春増刊号 二〇〇〇年一月)